
シンポジウム 2

去勢抵抗性前立腺癌 game changers — 進化する CRPC 治療 —

司 会 酒 井 英 樹 (長 崎 大)
杉 元 幹 史 (香 川 大)
演 者 塩 田 真 己 (九 州 大)
寺 田 直 樹 (宮 崎 大)
計 屋 知 彰 (長 崎 大)
枝 村 康 平 (岡 山 大)
加 藤 琢 磨 (香 川 大)

司会のことば

前立腺癌治療はとてつもないスピードで進歩している。手術や放射線治療の根治療法はもとより、今まで 80 年にわたって前立腺癌の薬物療法の中心であったホルモン療法についても、ここに来てついに大きく様変わりしてきた。特にこの数年、大規模な臨床試験結果から導かれる標準薬物治療の変化はめまぐるしい。うかうかしていると、半年前の常識が非常識になっていることも少なくない。

とはいうものの、前立腺癌の薬物療法ではアンドロゲン除去療法 (ADT) がその中心、ゴールドスタンダードであることには変わらない。しかし、ADT は決して根治療法ではない。また、ADT だけでは十分な治療効果が得られないこともわかっている。そのため近年、転移性前立腺癌に対しては新規ホルモン剤の併用が標準治療としての地位を確立している。

ADT を施行すれば、当然その後は必ず去勢抵抗性前立腺癌 (CRPC) に進展する。CRPC 後の治療に関しても様々な臨床試験の結果から、タキサンや新規ホルモン剤などいくつかの薬剤の有効性が認められてきた。しかし残念ながらその治療効果は到底満足出来るものではなく、限定的だといわざるを得ない。その問題を打破するにはどの様にすればよいのだろうか？

このシンポジウムでは、まず現在の CRPC に対する治療はどのような方向に向かっているのか、そして今後はどのような方向に向かうべきなのかを整理してみたいと考え

た。

そこで今回は、この目的のために西日本から選りすぐった次世代を担う若手の前立腺癌研究者にシンポジストとして登壇してもらった。CRPC に対する最新治療の総まとめと、今後の新規治療について、さらにはもうすぐ実現が期待されるテーラーメイド医療に向けての展望を各シンポジストに語って頂いた。

九州大学の塩田真己先生には、ここのところ標準治療になった転移性前立腺癌に対する upfront 治療後の CRPC に対しては、今までの CRPC と同じように考えて良いのかどうか、またどのようなシーケンスで治療戦略を考えるのが妥当かということについて詳しく解説頂いた。宮崎大学の寺田直樹先生には、今大きなトピックスのひとつであるバイオマーカーによる個別化医療について、ご自身のデータをもとに語ってもらった。長崎大学の計屋知彰先生には、現在の複雑な mCRPC 治療シーケンスにおいて Ra-223 の今後の出番はあるのか？あるとしたら、どういった場合なのかについて語ってもらった。岡山大学の枝村康平先生には、2021 年からわが国でも使用可能になった PARP 阻害剤と、さらには免疫チェックポイント阻害剤の可能性について考察してもらった。そして香川大学の加藤琢磨先生には、mCRPC というニッチな領域に対する標準治療薬 3 剤の使い分けについて、客観的なデータから持論を展開してもらった。

このシンポジウムは、皆様の知識の整理とアップデートの一助になったと考える。次世代の泌尿器科癌診療を担う若手の渾身のプレゼンは非常に熱いものであった。

これからの彼らの活躍にも注目しておいて欲しい。
